

この本よかつたです

しょうじ

生死と医療

佐々木恵雲著

「せいし」とは読まずに「しょうじ」と読みます。「死に對する生と捉えがちな生き方の問題を、生死(しょうじ)という一体のものとして捉えた仏教独特の読み方ですね。お釈迦さまは思い通りにならない四つの苦を説かれました。それが生老病死(しょうろうびよくし)の四苦です。医師であり僧侶でもある著者が、この生老病死について、科学的な面と宗教的な面、その両方から書いているところが興味深いです。なかでも「死」は、現代における最大の課題の一つと言えるでしょう。肉親や友人といった親しい人の別れを通して問われる私自身の生き方。「死」とは、単なる現象ではなく、常に他者との関係にあると述べられています。私たちは、いのちの尊厳ということを、自分が現実の場で直視できているでしょうか。

「なせいのちは尊いのですか」と問う前には、キリとさせておかねばなりません。

この本に出てくるエピソードはすべて医療の現場からのものです。以下に少しだけ紹介します。

浄土真宗のご本尊である阿彌陀如来は、親鸞聖人が書かれた「正信偈」にもあるように「歸命無量寿如来」とも言います。この「無量寿」とは、いのちに限りがなく、いつでもどこにでもいらっしゃる仏さまという意味で、それぐらい私もわかっていると思っております。

「命に限りがない阿彌陀さまってええなあ」「ずっと生きてはるんやなあ」「阿彌陀さまには永遠の命があつてええなあ」というぐらいに思っていた時期もありました。でもよく考えてみれば、阿彌陀如来のいのちはわれわれを生かさざるを得ない。そのはたらきをずっともたらしてくれる存在が、阿彌陀如来です。だから、いのちとは自分一人で生きていくというような個人のものということではなく、大いなるいのちによって生かされているのです。

その有り難いいのちを授かった私が、今どう生きるのが問われている。そのように味わわせていただく年齢を重ねていきたいと思えます。高齢社会のなかでいのちを長らえるという時、長命ということも大事ですが、真の

意味での長寿とはどういふことでしょうか。簡単に長寿と言いますが、この言葉には深い意味があります。ただ単に長命ということではなくて、寿命の寿ということを考えるとき、私のいのちは大いなる限りないいのちによって照らされて支えられている、そのような意味でのいのちになります。われわれが通常考える、いわゆる生存しているかどうかという意味でのいのちの見方が、視点を変えられていくなかで変革されていくということが、大事なのではないのでしょうか。

これまでの経験を通し現実を受け止めていくなかで、私たちがお子さんやお孫さんといった次の世代に、自らの思いを伝えていく。言葉だけではなく、自分の生きていく姿を通して伝えていかなくはならないものは、真の意味での長寿といういのちのあり方です。浄土真宗では、このように視点が変革されていくことを回心えしんと言います。そのようにいのちを味わっていききたいものです。

